



* 漱石の肖像写真もお使いいただけます

（松山市立子規記念博物館所蔵）

帰ろふと泣かずに笑へ時鳥

かえろうと なかずにわらえ ほととぎす

聞かふとて誰も待たぬに時鳥

きこうとて だれもまたぬに ほととぎす

明治二十二（一八八九）年五月十三日、漱石が子規にあてた手紙に記された俳句。現存する漱石句の中で最も古いものです。子規はこの時、大量に咯血して結核と診断され、以後「子規」と号しました。漱石は子規を励ますためにこれらの句を作り、「国家の爲め」に養生するよう訴えています。季語は「時鳥」で夏。

ゆく水の朝な夕なに忙しき

ゆくみずの あさなゆうなに いそがしき

明治二十八（一九一五）年七月二十六日、漱石が友人に宛てた手紙に記した俳句。手紙の中で漱石は、中学校の生徒が大人しいこと、洋行の資金を貯めるために松山に来たことなどを記しています。愛媛県尋常中学校の英語教師として赴任した漱石の月給は、校長を上回る八十円でした。季語は「ゆく水」で夏。

愚陀佛は主人の名なり冬籠

ぐだぶつは あるじのななり ふゆごもり

明治二十八（一九一五）年の作。「愚陀佛」は漱石の俳号です。この年八月、日清戦争の従軍を経て帰郷した子規が、漱石の下宿に転がり込みます。漱石は子規から熱心に俳句を学び、地元の俳句結社「松風会」の会員たちと句会を行いました。漱石の下宿は「愚陀佛庵」と呼ばれ、子規と漱石は五十二日間の共同生活の中で、日本の文学の創造と革新を志したといわれています。

鐘つけば銀杏散る也建長寺

かねつけば いちようちるなり けんちやうじ

明治二十八（一九一五）年九月六日、「海南新聞（のちの愛媛新聞）」に掲載された俳句。漱石はこのころ、松山の下宿「愚陀佛庵」で子規と五十二日間共に暮らし、子規から熱心に俳句を学んでいました。また、漱石は東京帝国大学の学生時代、鎌倉の建長寺に参禅しています。季語は「銀杏」で秋。

御立ちやるか御立ちやれ新酒菊の花

おたちやるか おたちやれしんしゅ きくのほな

明治二十八（一八九五）年十月、松山から東京へ帰る子規の送別会が開かれ、その席上で漱石が詠んだ俳句。

「送子規」という前書き（句の説明文）があります。「御立ちやるか御立ちやれ」は「出発しますか、それでは（気を付けて）出発なさい」という意味の松山弁。親友への惜別の情がにじむ一句です。季語は「新酒・菊」で秋。

半鐘と並んで高き冬木哉

はんしょうと ならんでたかき ふゆぎかな

「半鐘」は火事などを知らせる小型の釣鐘のこと。明治二十九（一八九六）年一月三日、漱石が東京の子規の居宅「子規庵」を訪れ、句会に参加した時に詠んだ俳句です。この句会には高浜虚子や河東碧梧桐のほか、森鷗外も参加しました。

わかるるや一鳥啼て雲に入る

わかるるや いっちょうないて くもにいる

永き日や欠伸うつして別れ行く

ながきひや あくびうつして わかれゆく

明治二十九（一八九六）年春、漱石が松山を去る時に作った俳句。この年の四月、漱石は高浜虚子と共に三津から広島を経由し、熊本へ向かいました。漱石は熊本第五高等学校で教鞭を執りながら生徒たちに俳句を教え、子規派の俳人として活躍します。季語は「鳥雲に入る」「日永」でいずれも春。

筒袖や秋の棺にしたがはず

つつそでや あきのひつぎに したがはず

明治三十五（一九〇二）年十二月一日、留学先のロンドンで子規の死を知った漱石が作った子規追悼五句のうちの一つ。「筒袖」は洋服を着て異国に居る漱石自身を表したものと思われまます。漱石は高浜虚子にあてた手紙の中で、ロンドンに渡る時、子規と生きて再び会うことはないと思っていたことを語っています。